

大阪大会以後

(福岡) 原 宏

小雨降る大阪の大会は最近に得た機会の中で最も親身に感じ、多くを教えられた秀れたものでした。研究例会とでもいうべき、アカデミックなしかもサロン風な、いうなればソングケンらしい雰囲気と言つてもよいでしょう。帰つて直ちに筆をとつてみた所、どうも村研礼讃に終りそうになつて、一寸腰が折れていました。そこに鋭い矢が飛んで来ました。「君のテンプル・スピーチはだんだん辛ラツさを失つて、何か村研礼讃に近くなりました。これはあぶないです」という戒めがしたゝめてありました。遅子なる有賀先生からです。思わす脳天に一発喰つた所です。戒めは更にマルピンでなく、源宏がもつと出ることを祈りますしという結びにまで続けられております。村研を愛する前にムラを愛さねばならぬということを考えます。有賀先生のお言葉を私は次のように解釈させて貰つています。即ち、私自身の身についた、堅く根を下した研究を進めること、日本にもメルピン以上の秀れた研究者が出ることです。もちろん私には前者を銘記すべきであつて、村研には後者と思ひます。リンドストロム氏、ドーア氏達の出席を得たことも大きな収穫でしょう。特にドーア氏と、中央公会堂に行く道すがら、英國農家のことを話しあつたが、氏との僅かな対

話の中に多くの示唆をうけたことは、能好の機会でした。

さて村研の運営については、自由発表方式は村研の大会が一日だけに限られている現状では無理だと思ひます。せめて二日あれば一日か半日は自由発表に割けると思ひます。又共同討議には今後ともテンプ・レコーダーを利用して頂きたいと思ひます。次期大会は東京ですが、歴史学や地理学の分野の方も多く出席されるよう、せいせい御勧誘下さるよう、せめて在京の斯学の人に働きかけて頂けたらと思ひます。

来年度の課題については、一応従統の線が決りましたが、大いに賛成です。研究通信の体裁は現状でいゝと思ひます。

大変勝手なことを述べましたが、只今大阪で報告したものをまとめていきます。その傍ら (J.S. Bennett Life in the English Manor) を読んでいますが、大変勉強になります。皆さんのお便りを期待してきます。